金融界回顧五十年

湧く水清き国

外山　茂　著

東洋経済新報社

著者紹介

昭和10年　東京帝国大学経済学部卒，日本銀行入行，
同行松江支店長，人事部次長，広島支店長，
計理局長，調査局長を経て，41年　理事．
昭和45年　財団法人電力中央研究所理事経済研究所長，
松永記念科学振興財団専務理事．
昭和53年　日本長期信用銀行顧問，現在に至る．

著　書

S・E・ハリス編『新しい経済学』（3巻，共訳，昭和24年，東洋経済新報社）．
『金融政策』（共著，昭和27年，春秋社）．
『証券と金融をめぐる諸問題』（共著，昭和44年，丸善）．
随筆集『湧く水清き国』（私家版，昭和52年）．
『金融問題21の誤解』（昭和55年，東洋経済新報社）．

金融界回顧五十年　　定価 1600 円

昭和56年11月5日 発行

著　者　外山茂（とやま しげる）
発行者　中井義行
発行所　東京都中央区日本橋本石町1の4　東洋経済新報社
郵便番号 103　電話03(270)4111(大代表)　振替口座東京3-6518

© 1981 〈検印省略〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします．
3033-6627-5214
Printed in Japan

はしがき

私が金融界の一隅に身を置いてから昭和五六年で四七年目となり、大学で金融を学びはじめてから五〇年になります。

この間に、色々な機会に執筆した文章や講演した記録はかなりの量になりますが、当然のことながら金融問題に関する論文めいたものが大部分です。そのなかから二十数篇を選び、加筆し取り纒めたものを、五五年三月『金融問題21の誤解』と題して出版したところ、一部の人々から注目され、好意ある批評を頂くことができたのは、望外の幸せでした。

その外の私の文章は、時々の必要に応じ書いたもので、内容は多岐に亙っており、金融界に関連するものもあるが、そうでないものもかなりあります。

このたび、このような文章を纒めて『金融界回顧五十年』と題し出版することとし、金融界の思い

目次

はしがき

一　戦時下の日本銀行の思い出……1

日本銀行に入行した頃（2）
日華事変下の勤務（9）
平沢道雄君と私（14）
太平洋戦争下の勤務（18）

二　終戦後の日本銀行の思い出……27

日本銀行統計局設立の頃（28）

一万田尚登総裁下の総務部勤務（33）
新木栄吉総裁と職員研修（40）
高度成長下の調査局勤務（49）
神武景気と鍋底不況（49）
高度成長論の登場（51）
通貨価値激動下の総裁たち（55）
山際正道総裁のこと（57）
宇佐美洵総裁のこと（60）
佐々木直総裁のこと（64）
貯蓄推進運動（69）

三　応召・出征・復員の思い出……77

未教育補充兵として（78）
兵隊の寝床（81）
出征中の読書——孟子（85）
中国の秤——秦始皇帝の分銅（91）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

占領地の通貨――塩・銀貨・紙幣（93）
湧く水清き国（95）
帰還――歴代総裁肖像のある廊下（97）

四　師と友から学んだこと……99

河合栄治郎教授（100）
山田文雄教授（112）
木村健康さん（116）
河合、山田両教授門下生の会（119）
田島道治さん（122）
洪純一さん（126）
吉田満君（130）
吉田満君の追憶（130）
『戦艦大和ノ最期』について（137）
永遠の問題提起（148）

五　日本銀行の文化サークル……157
社会思想研究会日本銀行支部（158）
「木蔭の会」（163）
俳句会とランニング（167）
六　短歌会の思い出……173
三五年続いた職場の短歌会（174）
短歌会での折々の卓話（179）
斎藤茂吉の「逆白波」など（179）
銀行員と詩人――田中冬二（182）
労働者と農民の短歌（194）
結婚祝詞と短歌（202）
詩歌の文庫本と古本（205）
子規の頃の東京（212）
ロングフェロー「矢と歌」（217）

アテネとデルフィ（222）

七　若い人々のために……233

日本銀行退職時に考えたこと（234）
——青年職員有志送別会席上にて——

生涯勉強のすすめ（246）
——洗心育英会懇親会にて——

幸福ということ——『夜と霧』の教えるもの（256）
——日銀青年行員研修にて——

初出一覧

金融界回顧五十年

——湧く水清き国——

外山　茂著

東洋経済新報社

日本銀行に入行した頃

私は昭和一〇年春大学を卒業し日本銀行に入行した。土方久徴総裁、深井英五副総裁のときである。入行式では総裁欠席のため、深井副総裁が代わって訓示を述べた。訓示のなかで、はっきり記憶に残っていることがある。

「水鳥が水面を静かに泳いでいるとき、水中では水掻きが断えず水をかいている。人目につかない水掻きの働きがあればこそ、水鳥は思うままに遊泳できるのである。諸君の仕事は水掻きに似ているが、欠くことのできない大切なものである。」

そこで、このとき入行した者たちは、「みずかき会」という会を作り、今でも時々集まっている。その中に前川春雄さんもいる。

この訓示は、いかにも深井さんらしいものである。深井さんは自分の頭で考えたことだけを話す人で、部下が書いたものを読む人ではなかった。それは、私が大学時代に深井さんの講演を聞いたときにも、主著『通貨調節論』を読んだときにも感じたことだった。

日本銀行職員の大部分は、昔も今も深井さんのいう水掻きである。水掻きにも色々ある。調査企画

面の水掻きもあるし、現金出納、割引、貸付、送金、国庫金、国債元利払など日常業務面の水掻きもある。職員の大多数は、日常業務面の水掻きをしている。上からの指令に従って、水掻きが働くことによって日銀の政策運営が行なわれるわけである。

私は入行と同時に神戸支店に配属となり、日常業務の見習いをさせられた。今でいうオン・ザ・ジョッブ・トレーニング（OJT）であり、支店の各課をローテートして仕事を覚えるのである。そこで必要なのは算盤と事務例規であって、深井英五の金融政策論や、河合栄治郎の社会政策論は不必要である。

大学を卒業し一かどの人間になったつもりの青年が、就職すると今まで学んだことと全く関係ない単純な仕事をやらされる。単純な仕事だけれどほかの人のように上手にできない。

私が支店で最初にやらされた仕事は、郵便物の受付発送であった。受け付けた郵便物は受付簿に記入し、封筒を切り裂いて中身が残っていないことを確認し、一日分の封筒の右肩をコヨリで綴じ地下の倉庫に保管する。これは後日問題が起こったときのためである。発送する郵便物は分銅のついた秤で目方をはかり、切手を貼り、発送簿に記入するのであった。それと併せて、課せられたのは、日計表の再鑑で、これは、前日に作成された日計表を、証票と突き合わせて確かめる作業である。日計表の作成はやらせて貰えなかったし、やれと言われても出来なかったろう。

今から考えれば、これは二度とはできない大切な経験なのであるが、当時の私には全くつまらない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

仕事であり、いっそ辞めて大学に戻ろうかと思う日々が続いた。このことはあとで述べるが、踏みとどまって勤務を続けようと思うまでには一年かかった（一二一、二三六ページ）。

同じことは、私より一年あとに卒業し日本生命にはいった関嘉彦君（東京都立大学名誉教授）、三菱電機にはいった中川俊一郎君（死去）、二年あとの三菱信託にはいった猪木正道君（前防衛大学校校長）などにも起こった。関、中川両君は最初の勤務地が関西であったので、芦屋に下宿していた私のところに来ては、仕事がつまらないから、明日にも辞めて東京に帰りたいといった。一年先輩の私は、こんどはなだめ役になり、一年辛抱してみたらどうかという。そうすると二人は「君はいつダラ幹になったのか」といったような目つきで、私を睨むのであった。

関、中川、猪木、私は、みな河合栄治郎先生の門下生である。河合先生の演習の雰囲気は、経済界のルーティン・ビジネスに直ぐにはなじめないような学生を作ったのである。

東大経済学部でも、ある教授は演習学生に経済界に出てからの心構えや交際の仕方などまで指導した。その演習にはいると就職に有利であるといわれ、希望者が多かった。これに対し、河合先生は、就職めあてで演習にはいる学生は断ると公言していた。しかし、先生も就職時期になると学生のため心配して下さったのである。

神戸支店の生活が一〇カ月たったとき、二・二六事件が勃発した。報道も不充分で、情勢がよくつ

かめないまま、支店では、事件が関西まで波及したときどうすべきかが相談された。

その時の神戸支店長は柳田誠二郎さんである。もし阪神間で軍が蜂起するとしたら、神戸にやって来るのは姫路からであろう。日本銀行神戸支店は軍資金調達のために襲撃されるかもしれない。姫路師団の動きは、沿線の市中銀行支店から知らせてもらい、日銀支店が襲撃対象になる恐れが出て来たら、金庫を閉め鍵を持って六甲山に逃げようではないか。これが柳田さんの総括であった。

二・二六事件に対する市民の怒りは、非常に強かった。しかし市民の怒りなどと関係なく、これを転機に軍部の力は一段と強まった。新しく成立した広田内閣の馬場鉄一蔵相は、高橋蔵相の国債漸減主義を放棄すると共に、低金利政策を強行し、低利国債による軍事費調達の道を開いただけでなく、既発債の低利（三・五％）借替えを行なった。

この国債借替えは、昭和一一年五月から九月にかけて、数回行なわれた。その時私は国債事務に回されていたので、数名の同僚と一緒に夜おそくまで居残りをした。その半年間は、私の日銀生活を通して事務的に一番苦労したときのように思う。国債借替えが完了した時に、総裁から担当者に金一封が出た。封書には「薄儀」と書かれており、五円札が五枚はいっていた。「薄儀」は戦前の一時期に日銀で使われた言葉である。これを発案したのは、矢野良臣さん（前丸善石油化学社長）で、彼が秘書室勤務のとき、「薄謝」と「祝儀」とをくっつけて「薄儀」とした。これは矢野さんから聞いた話である。

馬場蔵相は、一県一行をめざして地方銀行の合併を推進した。その第一着手が兵庫県の七行の合併であった。柳田誠二郎さんの次の神戸支店長は岡野清豪さんであったが、岡野さんは赴任する時に馬場蔵相から兵庫県下の銀行合併の推進を依頼され、着任と同時に活動を開始した。合併談がかなり進んだ段階で、調査役の藤井乙恵さんが上京し、日銀本店に中間報告をした。帰任した藤井さんの話では、重役から、「合併に反対ではないが、本店から指令したことはない。一体だれの指図で斡旋を始めたのか」といわれ困ったそうである。当時の日銀首脳部にとり、馬場蔵相のやり方には釈然としないことが多かったようである。

七行合併の仮調印式は、日銀神戸支店で行なわれ、馬場蔵相も西下してこれに立ち会った。私が馬場さんを見たのはこの時だけであるが、短軀で精気あふれる感じの人であった。ただ臨戦体制の確立に財政金融面から協力してはばからないファシズム的気質の人のように思えた。

合併銀行の名は、湊川神社にちなんで七生銀行はどうかとか、兵庫銀行はどうかとかいわれたが、世界的には神戸が一番通用するということで神戸銀行となった。今からみて最もよい行名の選択であったといえよう。

当時の総裁は深井英五さんである。深井さんの在任期間は昭和一〇年六月から一二年二月までであ

った。その間二・二六事件までは高橋蔵相、その後は馬場蔵相である。高橋蔵相は、金本位を停止し、赤字国債を出し、景気回復を図った。(注1)その効果が現われ昭和一〇年には生産設備がほぼ完全稼動に達し、物価上昇の気配も出てきた。そこで高橋蔵相は、国債漸減、財政抑制の方針に転じたが、それが軍部の強い反対にあったのである。

二・二六事件で高橋蔵相が横死した後、就任した馬場蔵相のやったことは先に述べた通りである。深井さんは高橋蔵相とは数十年の知己で、その智恵袋として活動して来たので、ここで当然やめるべきであったが、馬場蔵相に懇請されて、辞任を思い止まり難局乗り切りに協力することとなった。

深井さんは、通貨価値安定を重視する通貨政策の旗手であった。しかし一国経済が必要とする資金の供給ということも無視しなかった。深井さんは著書や論文の各所で、平常時には健全通貨政策で行くべきだが、国が緊急事態にあるときは、より高次の観点から健全通貨政策に固執してばかりおれないことがあるといっている。

この緊急事態のなかに金融恐慌だけでなく、事変や戦争まで入れて来ると、通貨政策の立場は非常に脆弱となる。深井さんは緊急事態にそれも入れていたように思う。「良馬は鞭影を見て走る」は当時の深井さんの有名なことばであるが、ここに深井総裁の悲劇があった。

しかしこの点で深井総裁だけを責めるのは公平でない。戦時中の総裁は、池田成彬、結城豊太郎、渋沢敬三すべて、その責めを免れない。戦争が起こり、国の存亡を賭して戦っているとき、中央銀行

総裁はどうすべきか。これは第一次、第二次大戦はもちろん、その後の局地的戦争も含めて、各国中央銀行総裁が直面した問題であった。

ただ深井総裁は、健全通貨政策のリーダーであったので、我々には高橋蔵相に殉じて潔く辞職した方がよかったという感じが残るのである。

深井総裁は、昭和一二年二月蔵相が馬場さんから結城さんに変わったのを機に退任した。その直後、昭和一〇年夏に高橋蔵相が主張したことをさらに精細に論じ、『東京日日新聞』に「今の時勢における生産、消費、通貨」という論文を寄稿した。これはインフレーション防止の緊要性を詳細に論じたものである。(注2)

(注1) 深井さんは、高橋蔵相と協力して行なった国債の日銀引受けは、昭和七年から一〇年までは非常に成功であったといっているが、私はこの点疑問に思っている(拙著『金融問題21の誤解』一三六ページ)。

(注2) この論文は深井英五著『金本位制離脱後の通貨政策』の末尾に収録されている。

深井さんが総裁を辞任した時、我々職員は一円前後を拠出して餞別を贈った。深井さんは、それで安井曽太郎に肖像を描いてもらった。これは安井曽太郎の代表作となっている。深井さんは、返礼として銅製の文鎮を我々に下さった。まだ職員が一四〇〇人という小人数の時代である。餞別の慣行は深井さんで終わりとなった。

日華事変下の勤務

深井さんのあと、池田成彬さんが総裁になった。池田さんは三井銀行の総帥として、昭和六年金本位停止直前にドル買いを行なったこと、日本銀行に批判的であったことなどから、日銀内部には釈然としない空気もあった。これは昭和三九年に三菱銀行頭取宇佐美洵さんが日銀総裁に来たときと同じである。しかし池田さんはその力量と人柄により、就任後日ならずして日本銀行職員から非常に信頼されるようになった。池田さんは病気のため半年足らずで辞職したので、神戸支店にいた私は池田さんの総裁振りを直接知らないで終わった。

次の総裁は結城豊太郎さんで、就任は昭和一二年七月、日華事変勃発直後である。日華事変を境として、日本は臨戦体制から戦時体制にはいり、経済統制が広範囲に行なわれ始めた。金融界も従来の日本銀行による金融調節に加え、政府による直接的統制を受けるようになった。

その第一歩は、臨時資金調整法の施行である。この法律は、設備資金の統制を目的とするもので、これにより自己資金による設備投資も、株式会社の新設、増資も認許可を要することとなった。この法律による認許可は主務大臣が行なうのであるが、それを日本銀行が代行した（その後昭和一五年から銀行等資金運用令で運転資金の統制も行なわれるに至った）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com